

最強魔人がガリ勉女子の
私にだけメロメロの飼
い犬に♡～ご主人様なの
に毎晩ばちゅばちゅ啼
かされちゃってます～

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

序章

「やらっ、やらああああっ♡ らめえ♡ イグッ♡ イッぢゃううう……っ!!♡♡」

ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡ばちゅんッ♡

四つん這いにされたまま、後ろから突き上げられるたびに、自分のものとは思えない嬌声が喉の奥から絞り出される。甘い悲鳴が部屋中に響き渡って、耳まで熱くなるのに、腰は勝手に彼を求めて揺れてしまう。

限界がすぐそこまで迫っている私を、彼——セルクは後ろから見下ろしているのだろう。振り向けなくてもわかる。きっと今、あの細められた金の瞳に嗜虐的な光を宿して、私が堕ちる瞬間を

愉しんでいるに違いない。

「トゲトゲのちんぽ、気に入ったみたいだな？　いつもより締まってるぞ？」

耳元に落とされる低い声に、内側がきゅうつと反応してしまう。今、私のなかにずっぷりと埋められているのは、今日彼が選んだ異形——猫科の雄を模した肉棒だ。その表面を覆う微細な鱗状の突起が、引き抜かれるたびに内壁をざらざらと擦り上げ、弱いところを残らずまくり上げていく。

ずりゅっ♡ざりっ……ざりざりっ♡ぐちゅぐちゅ……っ♡
(くう……っ！　私が召喚主なのに……！　こんな悪魔に、こんな格好で啼かされてるなんて……っ)

悔しさが胸を焦がすのに、その感情さえも快感の前では簡単に

溶かされてしまう。思考が泡立って、まともに抗うことすらできない。

「おい、ちゃんと集中しろよ。ずいぶん余裕だな。もっと激しくしてやらなきゃ満足できないか？」

咎めるような口調とは裏腹に、声音は愉しげで。次の瞬間、狙いすました角度から、泣き所を強かに抉られた。

「ッ……!! ひ、ぎゅう……っ♡」

ごちゅっ♡と鈍い衝撃が内側の奥深くに突き刺さって、潰れたような声が洩れる。思わず四肢から力が抜けて崩れ落ちそうになるのに、セルクの両手が腰をしっかりと固定しているから、逃げることも倒れることも赦されない。ただただ、与えられる快楽を受け止めるしかない体勢に、心が置き去りにされていく。

セルクの容赦ない抽送は止まらず、気持ちいい場所だけを的確に突き続ける。高められた感度のせいで、硬い突起の一粒一粒までをはつきりと感じてしまい、腹の奥からせり上がってくる波がどんどん大きくなる。またあの、何もかも奪われるような絶頂が訪れる——その予感に、恐怖が背筋を這い上がった。

「あ……っ♡ ああっ♡ も、イグ……ッ♡ セルク、も、ゆるじでえ……っ♡」

懇願する声は涙に濡れて震えている。内腿が自分の蜜でぐっしりと濡れている感覚が恥ずかしくて、でもそれさえどうでもよくなるくらい、早く楽になりたかった。

「んゝ、でもまだ二十分残ってるしなあ……？」

すぐ後ろで響いた、心底愉しそうな声。セルクの指が、汗で張

り付いた髪をそつと耳にかける仕草はやけに優しいのに、それが逆に、これから与えられる責めの予告に思えて、腰の奥がぞくぞくと震えた。

まだそんなに残っているなんて。その間にあと何度、この波に飲まれてしまうのだろうと思うと怖くてたまらない。なのに、下腹の奥がきゅうんと疼いてしまうのが悔しい。この悪魔の瞳に見下ろされているだけで、体が勝手に彼を求めてしまっていた。

「ふあ………っ♡ 奥、もうぐちゅぐちゅしないれえ………♡ もうやえてえ………♡」

この気持ちよさから逃げなければ、私が壊れてしまう。そうじゃなければ、隠しきれない何かに変わってしまう。もはや私にできることは、情けなく懇願することだけだった。

「ふーん、そんなにやめて欲しいか？　じゃあ『イカせてくださいセルクさま』って言ったらやめてやるよ」

「そ、んな……こと……！」

プライドが最後の砦として抵抗する。彼に屈することなど、召喚主としてあってはならない。でも、そんな私の逡巡など見透かしたように、セルクは耳元で囁く。

「ん？　言えないのか？」

どっちゅ♡ばちゅっ、ばちゅっ、ばちゅっ♡ぐちゅううっ♡

急かすように、咎めるように、柔らかな子宮の入り口を容赦なく挟む。何度も押しつぶされたそこは、ジンジンと熱を持って腫れ上がっているようで、硬い突起が擦れるたびに背筋が震える。

「ふああああッ♡　そこ、ちゅぶすのらめなのっ♡」

「じゃあ、言うのか言わないのか？　言わなけりやこのまま二十分止まらないぞ？」

（あ、あ……♡いいたく、ないけど、いわないと……！　このままずっとザリザリっていじめられちゃう……♡）

限界が近い。これ以上続けられたら、本当に心が壊れてしまう。

「ひぎゅう……っ♡　いう、いうかりや……♡　とまってえ……

♡　あううっ♡♡」

「なら、さっさと言えよ」

バチュンッ♡♡♡ぼちゅ、ぼちゅ、ぼちゅっ♡♡♡♡

子宮の最奥まで届くのではないかと思うほどの猛攻。内側の壁という壁が、硬い鱗にまさぐり尽くされて、何もかもが暴かれていくような恐怖と快感。

（こ、こわれる！　これいじょう、こんな風に突かれたらほんとにこわれちゃう……！　いうだけ、いうだけ……！　やめてもらうためだから、しかたない……！）

「ひうううっ♡　いう、いうますっ♡　イ、イ……ッ♡」
「うん、なんだ？」

振り返ると、ニヤリと笑う、人間離れした整った顔があった。汗ばんだ肌の匂いと、自分の蜜の匂いが混ざり合って、思考が溶けていく。その壮絶な色気に、最後の抵抗も消し飛んだ。

「イガせてくださいっ♡　セルクさま♡」

「はあ……かわいいやつ♡　望み通り、死ぬほどイかせてやる♡」
耳元で響く甘い声に一瞬安堵したのも束の間、「死ぬほど」という言葉の意味が脳に届く前に、腰が猛スピードで動き出した。

「そ、そんな！ やくそくが……ほあっ♡ ああああああッ♡
らめ、ええええ♡」

約束が違う。止めてくれると言ったのに、それは更なる責めの
合図でしかなかった。

ばちゅッ、ばちゅッ、ばちゅッ、ばちゅッ♡♡♡ばちゅんッ、ば
ちゅんッ、ばちゅんッ、ばちゅんッ♡

肉と肉が打ち合う音が、もはやリズムを刻む打楽器のように響
く。内壁を削り取るような硬い突起の摩擦が、限界を超えた感度
をさらに追い立てる。

「ああ、あ……また、きちやう……!! またいくっ♡ イクッ、
イグうううッ！♡♡♡」

視界が白く弾け、何も考えられなくなる。背中を反らし、爪先

がシートを強く掻いた。全身が痙攣するように跳ねて、ただ快感の奔流に流されるまま、絶頂に達した。

「孕めッ、ノエル……！」

私の絶叫と同時に、彼の熱い子種が、何度目かも分からないほどに奥深くに注ぎ込まれる。ザラついた肉棒が膣奥を貪り尽くす。びしゃっ♡ぶぴゅっ♡びゆるるるっ♡♡♡

溢れた液体が、太腿を伝ってシートに染み込んでいく。膣内を満たす熱と質量が圧倒的だった。

ハアハアと荒い呼吸を整える私の耳元に、セルクの声が熱を帯びた囁きとなって届く。

「早く孕めよ、ノエル？　そしたらオレの世界に連れ帰って、一時間と言わず、四六時中ずっと犯し続けてやるからな……♡」

散々中に出された精液でパンパンになった下腹部を、背後から伸びた手が優しく撫でる。その言葉に、背筋に戦慄が走った。彼は本気だ。本気で私を、自分の世界へ閉じ込めようとしている。抵抗する気力はもう残っていない。むしろ……。

「あぁっ……♡」

子宮が熱く疼き、新しい精液を求めていることに気づく。セルクは私の反応を見透かしたように嗤いながら、腰を引いた。ずるるっ……♡という音と共に巨大な肉棒が引き抜かれる。栓が抜けたことでコポンッ♡と白濁液が噴き出し、シーツを更に汚している。

「さあ、ノエル。次はどんな形がいい？」

（なんでこんなことに……）

霞んだ意識の中で、私は事の発端を思い出す。それは、あまりにも理不尽で、私を逃げ場のない檻に閉じ込めた、すべての始まりだった。

一章 契約の始まり

物心ついたときには、もう両親はいなかった。

父は私が五歳のときに死んだ。母のことは、顔も覚えていない。葬式の記憶といえば、黒い服の大人たちが、棺よりも私のほうをちらちら見ていたことくらいだ。誰が引き取るのか。視線はそう言っていて、そして誰も手を挙げなかった。

親戚は何人かいたらしい。でも父とは生前から疎遠だったとかで、全員に断られた。たらい回しの末、血の繋がらない今の養父母が私を引き取ってくれた。

血が繋がっていないことなんて、すぐにどうでもよくなった。

母さんは私が熱を出せば一晩中枕元に来てくれたし、父さんは学

校の行事のたびに、一番上等なネクタイを締めて来た。実の親が
どういうものかは知らないけれど、これ以上のものだとは思えな
い。

ただ——どこかで私は、この家に「置いてもらっている」のだ
と思っていた。

血が繋がっていないという事実は、忘れているつもりでも、ふ
とした拍子に足元から顔を出す。よくしてもらっている。だから、
迷惑をかけてはいけない。わがままを言っではいけない。この幸
せを、当たり前だと思っではいけない。

甘えたいと思っことは、たぶん、何度もあった。そのたびに、
喉の手前で飲み込んだ。二人はきつと、そんなことを望んでいな
かったはずなのに。

だから、恩を返したかった。孤児だと馬鹿にしてきた連中を見返したい気持ちも、正直あった。勉強だけは誰にも負けないと決めて、実際に負けなかった。名門大学の法学部に首席で合格したとき、母さんは泣いて、父さんは会う人みんなに合格通知を見せて回った。

努力は裏切らない。それがここまで生きてきた、唯一の実感だった。



実の父が残したものは、ほとんどない。

唯一まとまって手元にあるのは、段ボール一箱ぶんの遺品だ。

読めない文字で書かれた、分厚い革表紙の本が一冊。奇妙な紋章の彫られた木箱。用途のわからない、古びた金属の器がいくつか。骨董品としての価値もなさそうな、がらくたの山。

それでも捨てられなかったのは、それが父の生きた証の、ほとんど全部だったからだ。

中でもあの本には、昔から妙に惹かれた。開くたびに、意味のわからない文字列がただ並んでいるだけなのに、どこか整然としていて、まるで誰かに読まれるのを待っているみたいだった。中学生の頃から、暇を見つけては解読を試みた。文字の出現頻度を数え、規則性を探し、大学に入ってから言語学の文献まで漁った。そして去年、とうとう体系の大枠を掴んだ。

内容は——古代の召喚術の手引きだった。

魔人と呼ばれる存在を現世に呼び出し、契約によって使役する方法。手順、条件、代償、注意事項。細部まで克明で、創作にしては妙に実務的だった。父さんはなんでこんなものを、と思ったし、真に受けるほうがどうかしているとも思った。それでも解読の手を止めなかったのは、たぶん、これが父と話せる唯一の言葉だったからだ。



転機は、大学一年の秋に来た。

最初は気のせいだと思った。帰り道、背後の足音がずっと同じ間隔でついてくる。振り返ると、誰もいない。そんなことが何度

が続いて、ある夜、決定的なことが起きた。人気のない路地で、男に腕を掴まれたのだ。悲鳴を上げる間もなかった。――のに、次の瞬間、男は自分から手を離して逃げていった。

似たようなことは、その後も続いた。駅の階段で突き飛ばされかけて、なぜか手すりに引っかかって無傷だったこと。深夜、部屋の鍵が外から開けられかけて、なぜか途中で止んだこと。

こう物騒なことが続くのはさすがにおかしいと調べ始めて、行き着いた先が、遺産だった。

公的な記録を片っ端から取り寄せて、父の死後の手続きの痕跡を、法学部で覚えたばかりの知識を総動員して辿った。結論から言えば、父には資産があつた。それも、桁を数え直すような額が。管理は信託に置かれていて、受益者は私。二十歳になった時点で、

その全部が私に渡る。

……知らなかった。父がそんなものを遺していたなんて、想像したこともなかった。そして、今になって私が狙われている理由も、これで説明がつく。私が二十歳になる前に死ねば、あのお金の行き先は変わる。誰が得をするのか。候補は絞れても、特定まではできない。警察に行っても「実害がない」で終わるのは目に見えていた。実害が出るときは、私が死んでいるときだ。

一番許せなかったのは、私だけの問題では済まないことだった。私を狙うような連中が、母さんや父さんを人質に取らない保証がどこにある？ 二人は何も知らない。何の関係もない。私を拾って、育ててくれただけだ。それだけの人たちが、父のお金のせいで危険に晒される。

冗談じゃない。

二人に相談する、という選択肢は最初からなかった。話せば、あの人たちは絶対に私を守ろうとする。素人の正義感のまま、平気で人を襲わせるような連中の前に出て行ってしまう。それこそ、一番危ない。

だから、一人で抱えると決めた。誰にも言えないし、誰にも、頼れない。

でも、悔しいくらい、私には何もなかった。お金も、権力も、頼れる後ろ盾も。殺人さえ辞さない相手に対抗できるカードが、一枚もない。

——一枚も？

そのとき、机の上のあの本が目に入った。

馬鹿らしい、とまず思った。次に、どうせ放っておいても殺される、と思った。溺れる者は藁をも掴むというけれど、私の目の前にあつたのは藁じゃなくて、父が残した一冊の本だった。

やるなら、完璧に。

本には複数の魔人の名が記されていた。中でも、ひとときわ記述が多く、「最強格」とまで書かれた名前があつた。

——セルク。

強いに越したことはない。現代の武器を持った相手が来るかもしれないのだから、なおさらだ。この魔人を呼ぶことに決めた。

注意事項は全部で三十七項あつた。全部暗記した。触媒は現代でも揃えられる範囲のもので、魔法陣は定規とコンパスで、製図の精度まで詰めた。準備に二週間。決行は、母さんたちが旅行で

家を空ける夜にした。



詠唱を終えて、一瞬の沈黙。

(……だめ、か)

そう思った直後、魔法陣の中心から煙が立ちのぼった。煙は渦を巻き、輪郭を作り、人の形に収束していく。

そこに立っていたのは、青年だった。

背が高く、しっかりした体つき。淡く光を弾く銀の髪に、金色の瞳。輝くほど整った顔立ちなのに、口元だけがどこか軽薄に緩んでいる。人間と言われれば信じてしまいそうな姿なのに、纏っ

ている空気だけが決定的に違った。部屋の温度が、彼を中心に書き換えられたような感覚。

「……召喚されるのはずいぶん久しぶりだな」
低い、愉しげな声だった。

「人間界で召喚術は廃れて、もう呼ばれることはないと聞いていたが。なんだってこんなちんちくりんが……」

初対面で、ちんちくりん。気圧されかけていた分、かえって頭が冷えた。無駄口は厳禁。拡大解釈に注意。本の注意事項が頭の中で点滅する。

「無駄口は結構。お前の名前は？」

「セルクだ。というか、名前も知らずに呼び出したのか？」

「確認してるだけ！ いちいち口答えるな」

言い放った瞬間、足元の魔法陣がとくと脈打った。契約が繋がった、という感触が確かにあった。

セルクと名乗った魔人は肩をすくめ、にやりと笑う。

「はいはい。じゃあ次は——お坊ちやまの名前を教えてもらおうか」

「お坊ちやまじゃない。ノエル。——それと、私は男じゃない」
その途端、彼の動きが止まった。

「……女なのか？ まさか」

ひどく驚いた顔だった。金色の瞳が、初めて真っ直ぐに私を見た——ような気がした。その視線の意味を考える間もなく、次の一言が全部吹き飛ばした。

「そんなにぺったんこなのに」

「ふざけるな！」

人が気にしていることを！ こっちは命がかかっているのに！

「余計な話はいらない！ 今から契約の主幹を言い渡す。よく聞いて」

私は息を整えた。ここからが本番だ。一言一句、二週間かけて練り上げた文言。拡大解釈の余地を潰し、任務の遂行を確実にするための。

「私が二十歳になるまで、私と、私の養母、養父の命を守ること。この三人の誰も傷つけず、傷つくことのないよう全力を尽くすこと。私の命を狙う者が現れた場合、その素性と目的を探ること。以上を基本契約とし、状況に応じた私の個別の命令に服従すること」

セルクはわざとらしく片眉を上げた。

「ほう、護衛の任務か。……誰かに狙われてんのか？」

「そう。おそらく遺産相続の問題で、親族の誰かに。首謀者はまだ特定できていない」

「ふーん」

彼は顎に手をやり、さも名案のように言った。

「ある程度絞れてるなら、まとめて皆殺しにすればいいじゃないか。それくらい、オレにかかれば指先一つだ」

心臓が跳ねた。声のトーンが、天気の話と同じだったからだ。

「なっ……できるわけない！ 関係ない人まで……そもそも人を殺すなんて……」

「お前を殺そうとしてるんだろ？ やり返されたって文句は言え

ない」

「だめ！ そんな野蛮な方法を取りたいわけじゃない。解決の方法は私が考える。セルクは護衛と情報収集に集中して！」

「まあ、それが『命令』ならな。気が変わったら言えよ」

「変わらないから」

……やっぱりこの魔人、危険だ。この手綱は、絶対に私が握っていないといけない。

「ところで」

セルクの声が、少しだけ低くなった。

「召喚術に不慣れなようだが、わかってるよな？ この契約に伴う代償を」

「……わかってる」

契約には、本に明記された制約が三つある。

一つ。召喚された魔人は、基本契約と主人の命令に従うこと。

二つ。基本契約の満了前は、互いの同意なしに契約を解除できないこと。

三つ。一日に一時間、魔人に「自由時間」を与えること。

問題は、三つ目だった。

自由時間は、魔人が任意のタイミングで宣言して発動する。発動している間、主人の命令は効力を失う。召喚主を傷つけることと、許可なく第三者に危害を加えることだけは自由時間中も禁じられているが、裏を返せば、それ以外は何をしても止められないということだ。

しかも、この権利は塞げない。命令で潰そうとしても無効にな

るし、その日のうちに行使されなかった場合は、未明——午前三時を境に自動で発動する。繰り越しはない。毎日、必ず、一時間。

唯一の救いは、襲撃や戦闘のような、召喚主の命に関わる状況では宣言できないことくらいだ。護衛の穴にはならない。ならぬいが……この一時間が、歴史上いくつもの惨事を生んできたことも、本には克明に書かれていた。魔人の拡大解釈が最も通りやすい時間。召喚術が禁忌として廃れた、最大の理由。

わかっていて、私は呼んだ。

迷わなかったと言えば、嘘になる。こんなものを現代に放って、関係のない誰かに害が及んだら。その想像は、何度も私の手を止めた。

それでも、材料はあった。魔人は基本契約と命令に縛られる。

自由時間ですら、許可なく第三者を傷つけることはできない。手綱さえ握り続ければ、制御できる——本には、そう読める根拠が揃っていた。

そして、決め手は最後の頁にあった。

——主人が死んだとき、契約は消滅し、魔人は元の世界へ帰る。

つまり最悪、私が死ねば、全部が終わる。呼び出したものが、現代に残り続けることはない。

……どのみち、このままでは殺されるのだ。

なら、死ぬ前に、足掻けるだけ足掻いてやる。

「わかってるならいい」

セルクは満足そうに口の端を歪めた。

「久しぶりの人間界だ。楽しませてもらうぞ。——よろしくな、

ノエル」

そのときの私は、「楽しませてもらう」の意味を、深く考えていなかった。

二週間かけて潰したはずの、拡大解釈の余地。

それが一番大きく口を開けていた場所に、私はまだ気づいていなかった。

二章 手綱

召喚から数日は、拍子抜けするほど何事もなかった。

セルクは口を開けば軽口ばかりだったが、命令すれば従うし、黙っていると言えば渋々ながら口を閉じた。生意気ではあるけれど、契約はきちんと機能しているように見えた。

そして、護衛としての彼は——認めるのは癪だけど——完璧だった。

尾行の気配があれば私より先に気づき、いつの間にか相手特定して、逆に動きを探っている。

私は大学に通い、家では母さんの料理を食べて、父さんの下手な冗談に付き合う。命を狙われる前と何も変わらない日常を、表

向きは続けられていた。

その認識が甘かったと知ったのは、ある夜のことだ。

大学の帰り、人気のない通りに差ししかかったときだった。街灯の間隔が開いて、足元の石畳が暗くなる。ふいに、背後の闇が動いた。

振り返る間もなかった。ナイフの光が視界の端で閃いて――

「――消えな」

退屈そうな声と同時に、世界が白く発光した。

轟、と空気が鳴る。闇を裂いて奔った炎が、男の姿を一瞬で呑み込んだ。熱風が頬を打つ。悲鳴すらなかった。炎は現れたときと同じ唐突さで消えて、あとには焦げた匂いと、崩れていく黒い影だけが残った。

数秒前まで人間だったものが、夜風にさらわれていく。

「ひっ……！」

腰が抜けて、その場に座り込んだ。

「何か問題でも？ 主人の命を脅かす者は排除するのが当然だろ」
いつの間にか隣に立っていたセルクが、心底不思議そうに私を見下ろしている。銀の髪が、まだ残る熱で揺れていた。

「あ、あ……今、セルク……ころし……」

人が死ぬところを見たのは、初めてだった。ましてや、あんな、一瞬で。

「殺さなけりゃこっちの情報が漏れるぞ？ ほとんど痕跡も残らないから、死体が見つかることもない。お前が疑われることもない。最善策だ」

平然と言ったのける。当たり前だ。魔人に人間の倫理なんて通用するはずがない。こいつにとって人間の命は、たぶん虫と同じくらいの重さしかない。

とんでもないものを呼び出してしまった。わかっていたはずなのに、頭で知っているのと目の前で見るのでは、まるで違った。

焦げ跡を見つめる。膝が震えて、立ち上がれない。

……でも。

ここで竦んでいたら、終わりだ。私だけじゃない。母さんと父さんを守るために呼んだのに、呼んだ本人が吞まれてどうする。

私が、この魔人の手綱を握るんだ。

震える膝を叱咤して立ち上がり、セルクを睨みつけた。

「……今後は、敵を殺さないで。これは、命令！」

「あ？」

「セルクほどの魔人なら、殺さずに無力化することもできるはずでしょ？」

「まあ、できるが……そんなまだるっこしいことをわざわざ、なあ？」

「り、理由がある！」

私は早口で捲し立てた。感情論はこいつに通じない。だったら、護衛任務に絡めた理屈で押し切るしかない。

「殺人が続けば、いずれ警察が動く。失踪者が私の周りに集中すれば、真っ先に疑われるのは私。それに、こっちは情報が欲しいのに、消し炭にされたら困る。所持品とか、手掛かりになるものは必ず回収すること。可能なら別人に化けて、本人から情報を引

き出すこと。これは……命令！」

「……………」

セルクは金色の目を丸くして、しばらく私を眺めていた。

「ふむ……命令とあらば仕方がない。面倒だがな」

肩をすくめて、あっさり了承する。嘘は言っていないさそうだった。……よし。油断はできないけれど、こうやって一つずつ、粹に嵌めていけばいい。

そのときの私は、本気でそう思っていた。



それからの日々は、また平穏に戻った。

懸念していた「一時間」も、拍子抜けするほど平和だった。

「なあノエル、知ってたか？ 人間界ってのはずいぶん便利になつてゐるらしいな」

「いまさら何……。そんなの常識だから」

「ほう？ じゃあこれは？」

彼は鳥や猫や鼠に姿を変えては街を飛び回り、頼んでもいない報告をしてきた。橋の上から見下ろした川霧が見事だったとか、屋根の上は猫の縄張り争いが激しいとか、どうでもいい情報ばかり。奇妙ではあったけれど、害はない。数百年ぶりの人間界を觀光しているだけなんだろうと思つていた。

……我ながら、どうかしていると思う。気づけば、この魔人の軽口にいちいち言い返している。人間相手にだって、誰かところ

なにぼんぼん言葉をやり合ったことはなかったのに。憎まれ口にくせに、妙に間がいいのが悪い。

別に、楽しいわけじゃない。手綱を締めるための監視の一環だ。……そういうことに、しておいた。

ただ——時折、妙な視線を感じることがあった。

机で勉強しているとき。ベッドで読書をしているとき。ふと顔を上げると、部屋の隅の暗がりから、金色の瞳がじつとこちらを見ている。

「……何？」

「いや？ 別に」

そう言って目を逸らすくせに、探るような気配だけが残る。

一度だけ、報告の合間に、妙にしみじみと言われたことがある。

「しかし……最近は、女もずいぶん外で働くんだな。役所にも、学び舎にも、当たり前前みたいにいる。オレが最後に見た人間界じゃ、考えられなかったが」

「何、その感想。おじいちゃんみたいなこと言って」

「何百年も前と比べりゃ、実際そうだろうが」

そのときの私は、軽口の一つだと思って流した。その一言の本当の意味を思い知るのは、もう少しだけ、先の話だ。

◇セルク◇

昔は、それなりに派手にやってたもんだ。戦だ、玉座だ、復讐だと、呼び出されるたびにご大層な欲を叶えてやった。……それ

も、とうの昔の話だ。召喚術が禁忌として廃れてからは、オレを呼ぶ人間もいなくなった。おかげでこの数百年、退屈で死にそうだった。魔人は退屈じゃ死なないから、質が悪い。

そこへ来て、久しぶりの召喚ときた。しかも呼び出したのは、王でも將軍でもない。ちんちくりんの学生一匹。しかも、女ときた。任務は護衛で、おまけに『殺すな』。

とんだ茶番だと思ったが——暇つぶしには、ちょうどよかった。実際、こいつをからかうのは、案外面白かった。

ノエルは堅物で真面目だ。暇さえあれば分厚い法律書を読み漁っている。その割に、オレが茶々を入れると律儀に返してくるし、からかえば真っ赤になって怒る。その反応がいちいち新鮮で、退屈がいい具合に紛れていった。

そんなある日、また別の刺客が現れた。

夜道。ノエルの背後、十歩の距離まで詰めた男が、懷から刃を抜く。

遅い。

オレは影から一步で男の懷に踏み込み、突き出された手首を二本の指で摘まみ上げた。骨は折らない。折らずに、絶対に外れない角度で極めるだけだ。男が声を上げるより早く、足を払って石畳に伏せさせた。背中に膝を落とし、極めた手首をもう片方ごと後ろで束ねて、空いた手で口を塞ぐ。

「はい、終わり」

男を膝の下に押さえ込んだまま、周囲をひと舐めする。仲間がいるなら、ついでに潰しておくのが早い。

——と。

うなじの毛が、一瞬だけ逆立った。見られている。それも、かなり近くから。

探る。屋根の上、路地の奥、街灯の届かない隙間。何もいない。魔力の残り香も、息遣いも、視線の出どころも。人間なら百歩先の心音まで拾えるし、魔人が潜んでいれば気配くらいは掴める。それが、掴めない。

（……気のせいかな）

ノエルに傷一つ付いていない以上、追う理由もない。オレは男の得物を取り上げ、身分証を抜き、雇い主について吐かせてから、然るべきところに突き出してやった。まったく、殺していいなら三秒で済む仕事なんだがな。

喉の奥に小骨が刺さったような感触だけが、しばらく残った。

戦闘が終わっても、ノエルの震えは止まらなかった。

「……っ、う……」

オレがいる以上、傷一つ付くはずがない。それでも怖いものは怖いらしい。膝を抱えてうずくまり、必死に涙をこらえている。

泣けばいいものを。主人の威厳ってやつか、ただの強がりか。

潤んだ瞳で唇を噛むその姿を見た瞬間、胸の奥で、ドクリと何かが脈打った。

（なんだ、この感情は……）

庇護欲？ いや、そんな生温いもんじゃない。怯える獲物を前にした捕食者の本能に近い。だが、食い殺したいわけでもない。ただ、その弱々しい姿を、震える身体を、もっと間近で感じたい

という衝動。

こんなとき、どう声を掛けるのが正解なのか。長く生きてるくせに、わからなかった。



その夜。机に突っ伏して眠っちゃったノエルを、ベッドまで運んでやった。

月明かりの下の寝顔は、起きてる時の強気な仮面が嘘みたいに無防備だ。

「……呑気な奴」

そっと、頬に触れる。指先に伝わる、人間特有の壊れやすい熱。

（――欲しい）

明確な言葉になって、その感情が脳裏を掠めた。初めて抱く、焦がれるような渴望。千年生きて、初めてだ。

喉が鳴る。

……だが、まだ早い。もう少し、このぬるま湯に浸かっていた自分がいた。

オレは名残惜しく指を離して、寝顔をもう一度だけ焼き付けてから、姿を消した。

三章 引き金

その日は、よく晴れていた。

午後の講義の合間、中庭のベンチで資料に目を通してしていると、誰かが近づいてくる気配がした。反射的に身構える。……違う。殺気じゃない。もっと落ち着きのない、そわそわした熱だ。

「ノエルさん……」

声をかけてきたのは、最近の講義でよく隣になる男子だった。課題の解釈について、ときどき言葉を交わす程度の相手。……白状すると、この大学で、それくらいの雑談ができる相手は彼くらいだった。

昔から、人付き合いは得意じゃない。孤児だと囃されて、言い

返す代わりに勉強で黙らせてきた。真面目すぎるとか、可愛げがないとか、陰で言われるのにも慣れている。だから、課題の話とはいえ身構えずに話せる相手ができたことに、ちよつとだけ浮かれていたんだと思う。

その彼が今、視線を彷徨わせて、手を何度も握り直している。

「少し、話せるかな」

危険は感じない。それに、セルクが近くにいる確信もあった。

「……少しなら」

私は資料を閉じて、彼についていった。

連れて行かれたのは講義棟の裏だった。人目につきにくく、風の音だけがする場所。

「私に、何の用？」

聞くと、彼は深く息を吸い込んだ。

「ノエルさんが、好きです。付き合ってください」

予想はついていたはずなのに、実際に言葉にされると、心が少し揺れた。

別に、彼が好きだったわけじゃない。受けるつもりも、最初からなかった。ただ——こんな私のどこを、というのが、純粹に気になってしまった。

「……どうして、私なの？」

あとから思えば、好奇心は猫をも殺すとは、よく言ったものだ。彼は慌てたように理由を並べ始めた。真面目そうだとか、質問したとき丁寧に教えてくれたとか。たわいない言葉なのに、頬がほんの少しだけ熱くなるのが自分でもわかった。

——その瞬間。

空気が、変わった。

日向にいるのに、うなじのあたりだけ温度が下がる。肩に重みがかかって、振り返るより早く、腕が回された。

「悪いが」

低く、冷えた声。

いつの間にか、セルクが人の姿で立っていた。私の肩を抱き寄せて、逃がさないように引き寄せながら、男を見下ろしている。

「こいつはオレの女だ」

金色の瞳が、ずっと細められた。

それだけだった。脅し文句もない。手も上げていない。なのに、目の前の男の顔から、みるみる血の気が引いていった。理由は本

人にもわからなかったと思う。ただ、生き物としての本能が全力で警報を鳴らしたんだ。

「す……すみませ……っ」

彼は言葉にならない声を残して、転がるように走り去った。振り返りもしなかった。

その背中が見えなくなるまで、セルクは黙って見送っていた。それから、独り言みたいに言った。

「……命令がなかったら、消してた」

冗談の響きは、どこにもなかった。明日の予定でも口にするような声で、この男は今、人ひとりを消す話をした。あの夜の炎が頭をよぎって、背筋が冷える。

「なっ……何を言って……！」

私はようやく我に返って、肩の腕を振りほどこうとした。びくともしない。

「あんな、ただ告白してきただけの人を……！　だいたい、付き合おうなんて思ってた！　どうして告白しようと思ったのか、気になって聞いただけ！」

「へえ。頬を染めてか？」

「なっ……」

見られていた。反論の言葉が、喉で詰まる。

「それに……」

言うべきことは、ほかにあった。喉がひりつくのを感じながら、私はセルクを見上げた。

『『オレの女』って、どういう意味？』

問い詰めると、セルクはわずかに口角を上げた。

「意味？」

顔が近づく。

息がかかるほどの距離で、囁かれる。

「あとで、ゆっくり教えてやるよ」

抱き寄せる腕に、はつきりと力が込められた。

胸の奥から、心臓の速い鼓動が伝わってくる。

恐怖と、理由の分からない高揚。

さつきまでとは違う熱。

怖い……。初めてセルクを心底怖いと思った。

「今日の一时间、楽しみにしとけ」

耳元に、熱を含んだ囁きが届く。その声に、私はビクツとして

身体を硬直させた。

次の瞬間、彼は跡形もなく消えていた。地面を走り去っていくネズミの姿。いつも通り化けたのだろう。

胸騒ぎがする……。それは、私の平穏を終わらせる、破滅の予感のように思えた。

◇セルク◇

——オレは、最初からぜんぶ見ていた。

ノエルを講義棟の裏へ連れ出した、あの男。どこにでもいるような冴えない顔の、魔力も覇気も感じられない、有象無象の類だ。木陰から様子を窺っていると、男は顔を真っ赤にして、好きだ

とかなんとか嘯きやがった。

(……はっ、身の程知らずが)

鼻で笑い、当然ノエルが冷たくあしらって終わるものだと思っていた。

だが――。

「……どうして、私なの？」

あろうことか、あの堅物のノエルが、断るところか問い返して
いやがる。

ほんの少し、驚いたような、けれど満更でもなさそうな表情で。

(あいつが……他の男に?)

その瞬間、思考が真っ赤に染まった。

次いで湧き上がったのは、ドロドロした真っ黒い感情だ。

あの女が、他の男を見る？

その言葉に耳を傾ける？

あまつさえ、他の男のものになる可能性があるのか？

その想像は、オレが予想していた以上に不快で、耐え難いものだった。

許せるはずがない。

オレが契約し、守り、側にある女だ。その魂も、肉体も、一ミリたりとも他人に渡す道理はない。

（ならば——オレのものにしてやる）

理屈も契約の精神もどうでもいい。

ただ、誰にも触れさせないよう、オレの色で塗り潰してやる。

その昏い決意が、オレとノエルの関係を決定的に変える引き金

になった。

召喚術ってのは、確かに強力だが、召喚主にとっては諸刃の剣だ。

毎日一時間、命令が効かなくなる時間。この綻びを突かれて、魔人の拡大解釈に致命傷を負わされた召喚主は数え切れない。現にオレも、昔「事故」を装って主人を陥れ、契約を強引に手放させたことがある。

あの小娘は、その怖さをあまりに甘く見ていた。
ま、後の祭りだがな。

◇ノエル◇

胸騒ぎは、現実になった。

夜、自室で勉強をしていると、背後の暗がりから、セルクが音もなく現れる。彼はもう、いつものお調子者な態度ではなかった。

「ど、どうしたの？ 何か用？」

「今日の一時間を行使する」

「また……散歩でも、いくの？」と尋ねる私の声は、ひどく上ずっていた。昼間の彼の発言が、嫌な予感となって全身を締め付けている。

「いいや、今日は違う楽しみ方をさせてもらう」

「楽しみ方……？」

私の疑問に答えるように、彼はにやりと口角を歪めた。

「こういうことだ」

突然、私は抱き上げられ、近くにあったベッドに転がされる。間髪入れずにのしかかってくる、たくましい身体。夜の闇が、彼の輪郭を一層、大きく、禍々しく見せた。

「なっ！ やめ……！ こんなこと、許されると……！」

「オレが禁じられてるのは、お前を傷つけることだけだ」

「だ、だからって、何をする気……!？」

「ただ……気持ちよくしてやるだけだ、おかしくなるくらいにな」
その言葉の意味を、一拍置いてやっと理解した私は、顔がカッと熱くなった。

「傷つけない」の裏側に、そんなことが含まれるなんて。魔人が人間の主人をそんな目的で扱いたがるなんて、思い当たらなかった

たのだ。

彼の金色の瞳が暗闇の中で爛々と輝いている。これから起こることへの絶望と恐怖で足がすくむ。

「や、やめて……」

「ハァ……♡ そんなかわいい目で煽るなよ？ 優しくしてやれないぞ。どうせ処女だろ？」

事実だ。何も言い返すことができない。その沈黙を、彼は肯定と受け取った。

「そうか……オレがお前の初めての男か。よし、やっぱり最初だけは優しくしてやる」

そういうセルクの表情は愉悦に満ちている。まるで獲物を前に舌なめずりをする肉食獣のようだ。

「ひっ……！ やだぁ！」

迫りくる端正な顔に、思わず呼吸が止まる。魔人とはいえ——いや、魔人だからなのか、こんなに造作の整った顔を睫毛の一本まで数えられる距離で見せられたら、心臓が勝手に肋骨を叩きだす。嫌悪じゃない。もっと厄介な、理屈で名前をつけられない何かだ。どんな論理を当てはめても、この動悸には抗弁できない。うまく反証できないまま、胸の奥がざわつく——その隙をつくように、唇が重なった。

驚いて吸い込んだ息の隙間から、遠慮のない舌が滑り込んでくる。ぬるりと濡れたそれが歯列をなぞり、上顎の柔らかいくぼみを、つ、と舐め上げた。ぞくつ、と項の産毛が逆立つ。

「んっ、ふぁ……♡」

（う、うそ……セルクの舌に、口の中舐められちゃってる……っ
心だめ、頭の中、溶けそう……）

なぞられるたび、後頭部の芯がじんと痺れる。その痺れが背骨
を伝って腰に落ちて、膝から力を抜いていく。

やっと唇が離れたとき、私と彼の唇の間には、銀色に濡れた糸
が一本、橋みたいに渡っていた。それがぷつんと切れて顎に落ち
る。遅れて羞恥が沸騰した。

（キスも、初めてだったのに……！　　よりにもよって、こんなや
つと……！）

悔しくて、涙のにじんだ目で睨みつける。なのにセルクは、そ
んな私を見てクスリと口の端を上げただけだった。

「かわいい」

たった一言。なのにどうしてか、胸の奥をきゅっと握り潰されたいに縮む。

「なっ……何を……っ」

言い返そうと開いた口は、また塞がれた。

「ふ、ん……っ♡ あ……♡」

言葉ぜんぶ、甘い水音に吸い取られる。好き放題に舐めまわされて、頭がくらくら揺れる。その間も彼の手は止まらない。ブラウスのボタンが、上から順に、ひとつ、ふたつと外されていくのが布の張りの緩みでわかる。

慌てて手で突っ張った。胸元を隠そうとする。けれど、力の差は絶望的だった。セルクは私の両手首を片手であっさり束ねて、頭の上のシートへ縫い留めてしまう。

ブラウスが左右に開かれ、ブラのカップが下着ごとぐいと上に押し上げられた。ふるっ、と胸が零れ出る。

（男の人に、見せたことなんてなかったのに……っ、こんな……！ セルクに、全部見られちゃってる……！）

夜気の冷たさと、彼の熱い視線が同時に肌に降る。晒された素肌の白さが恥ずかしくて、身をよじって逃げようとした。

「み、みるな……っ、変態……！」

「もう遅い。……それに、見るだけで終わるわけないよなあ？」

ぞくり、と予告が背筋を撫でる。次の瞬間、大きな掌がすりと乳房の上を滑った。

「ひ、や……っ」

掌の、ざらついた面が、柔らかい膨らみの輪郭を確かめるよう

になぞる。触れられた一点から、細かな粟が皮膚の下を放射状に走った。撫でられるたび、その粟立ちが乳房の付け根まで広がって、奥のほうがつんと重くなる。

「やだ、そこ、やだあ……♡」

拒む言葉なのに、語尾が勝手に甘く溶けて震える。彼の掌が膨らみの形をゆっくり揉み込むたび、知らない熱が、胸の芯でとりと燦りはじめた。

「ふーん。何が嫌なんだ？　こういうことか？」

指が、意地悪くふもとから頂へと登ってくる。一番敏感な尖りに指先が掠めた途端、鋭い痺れが背骨を下から突き抜けた。

「ひゃう……♡　あ……♡　つ、そこ、は……♡　♡」

触れられただけで、そこが硬く芯を持ってしまっているのが自

分でわかる。当然、セルクも気づいていた。指の腹が、勃った先端の弾力をつぶさに測っている。

「初めてなのに、もうこんなに乳首硬くして。……かわいいな」
耳元に落とされた、逃げ場のない事実。声の低い熱に、体の芯がぞわりと融かされる。

彼の指が、赤く尖った先端を、こりこり♡と根元から捏ねはじめた。指の腹で押しつぶされ、脇へ弾かれ、上へ擦り上げられる。そのひと擦りごとに、乳首の芯から生まれた甘い震えが、まっすぐ下腹へ落ちていく。落ちた先で、行き場のない熱がぐずぐずと溜まっていく。

「ふ……っ♡ んん……♡ は、あ……♡」
抑えたいのに、声が甘く高い音になって漏れる。

「かわいい声出すじゃないか。……もつと聞かせろよ」

喉の奥で鳴る愉悦の低い響きと一緒に、指の動きが、ねっとり
と粘度を増していく。

「ふ、ふざけ……っ、ひっ♡ うそ、口で……っ!?」

セルクが、あろうことか、もう片方の尖りを熱く湿った口に含
んだのだ。ぬるっ、と舌が乳輪ごと巻き取る。

（あ、やだやだ、セルクの、ぬるぬるの舌で、乳首、舐められ
ちゃってる……っ♡ちゅうちゅうって吸わないでえ……!! なん
か、奥のほうで、ツーンって、するのお……っ♡）

柔らかい舌肉が、転がすように蕾を撚る。吸い上げられるたび、
鋭い痺れが乳房の奥へ突き抜けて、その一本の線が下腹の熱と繋
がってしまう。口の中でこころ転がされ、根元をきゅっと搾り

取られる感触に、頭の芯がとろける。

「ひぐ……っ♡ やだ……、歯、たてないでっ！」

痛くないぎりぎりの加減で、カリッ、と前歯が芯を挟む。背中が勝手に弓なりに反る。噛まれて反ってしまう自分の体が恥ずかしくて、奥歯を食いしばりたくなる。

「ふ、う……ああ……ッ♡ んあっ♡ んんっ♡」

最後にぢゅうっ、と強く吸い上げられて、またしても四肢がびくと跳ねた。含んだまま、セルクが低く笑う。その振動すら乳首に響く。

「……っ、は。ぴくぴく跳ねてて、かわいいな……たまんねえ」

低く掠れた声に、一瞬だけ余裕の欠けた熱が混じった気がして――なぜか、心臓が跳ねた。

「さて。……こっちはどうなってる？」

ぽつりと落ちた声とともに、彼の手がスカートの裾から忍び込む。太腿の内側を撫で上げた指先が、ショーツのクロッチの上を、つ、となぞった。

「ちょ、そこ、は、触らないで……!!」

「触るに決まってるんだろ。……何されるか、わかってないのか？」

「わ、わかるもん……!」

なけなしのプライドが、つい強がり吐かせる。わかる。講義で、条文で、判例で、この手の行為の「定義」なら諳んじられる。知識としては、ぜんぶ知っている。だから、こんなことくらいで動じるはずが――

「ほう？ さすがだな。頭でっかちのお嬢さんは、そんなこと

までご存じか」

見透かしたように、セルクがにんまりと笑む。

「じゃあ、これも余裕だろ。ほら」

「ひゃんっ!!」

布地の上から、すり♡と指が前の突起を的確に捉えた。途端、下腹の奥がきゅうん♡と収縮して、息が詰まる。ただ神経の集まった小さな器官。それだけのはずだった。こんな、体の芯ぜんぶを引き絞る一点だなんて、どこにも書いてなかった。

「これ、なんて言うか知ってるか？」

「し、ってる……っ、陰核」

正確な用語を、必死に絞り出す。定義どおりの、正しい呼称のはずだ。なのにセルクは、呆れたように息を吐いた。

「はあ……。堅物め。クリちゃんだろ？」

「は……っ、そんな俗称……っ、ひんっ♡」

耳慣れない卑猥な呼び名に赤面する暇もなく、布越しに、こす、こす、こす♡と指が上下に擦り上げた。薄い一枚を挟んで擦られると、じんじんした感覚が芯から広がって、腰が逃げようと勝手に揺れる。

「やあ……それ、やだあ……。♡ そんな、こすらないでえっ！」

「嘘つけ。ノエルのクリちゃんは、もっと擦ってほしそうだけだな？ ほら、布の上からでもわかるぞ。……こんなにぷっくり尖らせて。自分でもわかるだろ？」

濡れて張りついたショーツの上から、指の腹で押しつぶすように円を描かれる。熱を持って膨らんだ蕾が、彼の指の形をなぞり

返しているのが、自分でもわかってしまう。

（ち、ちがう、これは……不可抗力……！　意思とは無関係な、勝手な反応で……！）

「し、知らない……っ！　そんなこと、ないもん……！」

嘘だった。触られるたび、そこが勝手に反応して、布を内側から押し上げているのがわかる。恥ずかしくて、認めたくなくて。

「ほんつとに素直じゃないな……。まあいい。ゆっくり吐かせてやるよ」

「な、何を吐かせ……っ!?　もう、これ以上はやめてえっ！」

もう頭が回らない。意識のぜんぶが、執拗にこりこり♡と捏ね潰され続ける一点に持っていかれる。

（へん……なんか、へん……！　セルクの指で捏ねられるたび、

切ないのが、どんどん、大きくなってくる……！　こわいはず、
なのに……体が、勝手に、もつとつて……っ♡

「お。……だいぶ濡れてきたじゃないか」

にゅち♡と、下から粘着質な音が鳴って、耳を疑った。

「意味、わかるか？　オレに触られて喜んでるってことだぞ」

「そんな、そんなわけない！」

必死で否定した。

（そんなはずない、こんな魔人なんかは無理やりされて喜ぶなんて、そんな馬鹿な……！）

でもそんな心の抵抗は次の瞬間あっさり崩れ去った。

「何が違う？　ほら」

「ひ、やああ……♡　直接は、だめえっ♡　あ、ああッ♡」

くちやつ♡くちゅッ、ぬちゅちゅ♡

指がショーツの中に滑り込んで、割れ目を何度も往復する。誰にも触られたことがないそこは、彼に言われた通り、蜜をたらし、指を歓迎していた。露骨な水音に耳を塞ぎたくなる。

「ほら、びしょ濡れだ」

セルクがショーツから手を出して見せつけてきた。ねっとり糸を引く愛液がたまらなく淫靡で、息を呑んだ。羞恥で頭が溶けそうだった。

「一回イッてから挿れてやる」

「行つて、から？ ……どこ、に？」

頭がついて行かなくて、ぼんやりとした頭で問いかけると、セルクが心底おかしように、そしてどこか瞳に熱を宿して言った。

「フッ、かわいいなあ……ノエル。こんなにウブなのに……オレにこれから、ぐっちゃぐちゃになるまで、犯されちまうんだからなあ……♡」

その言葉に、戦慄した。犯されるって……。ここまでの全部がどこか非現実的に捉えられていて、本当の意味を想像できていなかった。

（私が、セルクに、犯される……？ってことはまさか……ここに、セルクが入ってくるってこと……!? そんなの、絶対、無理……!）

「や、やだ！ セルクお願い、本当にやめて……」
涙を流して懇願するけれど、無駄だった。

「ダメだ。もうオレはノエルをオレのものにすると決めた」

「ひ、そ、んな……は、ふう……♡♡」

言うが早い、ショーツが両脚から抜き取られた。膝を割られ、大きく開かされる。夜気が、濡れそぼった粘膜にひやりと触れた。

「や……っ、み、見ないで……！」

「見るさ。……はは、とろつとろだ」

金の瞳が、誰にも見せたことのない場所を至近距離で検分している。視線だけで肌が焦げそうで腰をよじると、その太腿を大きな手ががちり押さえ込んだ。逃げ場を失った脚の間に、端正な顔が沈んでいく。

「ちよ、顔、顔ちかい……っ！ まさか……」

「そのまさかだよ」

じゅる……っ♡れろ、れろお……っ♡ちゅ♡

「ひいんっ!?♡♡」

熱くて柔らかいものが、割れ目を下から上へ舐め上げた。舌だ。セルクの舌が、私の、いちばん恥ずかしい場所を――。

（う、うそ、口……!? セルクに、あんなところ、舐められちゃってる……っ♡だめ、汚いの……そんな、音立てて……!）

「や、だめっ、汚いから……っ、ひう!♡」

「ん。……汚くない」

咎める間も与えず、セルクは尖った突起を唇で覆い、飴玉みたいに転がしはじめた。ちゅぽっ♡じゅる♡と響く水音のひとつひとつが、頭の芯を直接痺れさせる。指とはぜんぜん違う。柔らかくて、熱くて、ぬるぬるで――逃げようのない密着で、弱い場所ぜんぶを包んでくる。

「あっ♡ や、す、吸っちゃだめ、だめえっ♡♡」

「ん、ぢゅ……っは。……あつま。頭くらくらししてきた」

舐めながら喋らないでほしい。吐息も、低い声の振動も、ぜんぶそこに響くの。腰が勝手に浮いて、内腿がびくびくと痙攣しはじめる。お腹の奥から、知らない大きな波が迫り上がってくる。（あ、だめ、なにか、くる……っ♡上がって、くるっ……こわい、こわいこわい……!）

「いやあっ!♡ なんか、なんかくるっ! きちやう、きちやうのお……っ!」

じゅううう——っ♡♡

ひとときわ強く吸い上げられた瞬間、何かが全身で弾けた。

腰が跳ね、四肢がびくびくと痙攣する。頭の中で白い光が明滅

して、何も考えられなくなる。

「ふあ……あ……な、に……いまの……」

自分の身に何が起こしたのかも分からなかった。荒い息をつき、胸を大きく上下させることしかできない。汗ばんだ肌が夜気に晒されて粟立つ。

「上手だったな。それをイクッていうんだぞ」

「い、く……？」

「そうだ。これから散々イクことになるから、ちゃんと言えとけ」

「そん、な……」

くったりと力の抜けた私に、ふわりと影が落ちる。唇に、軽いキスがひとつ。

「んう……♡」

「かわいい」

そんな言葉にすら胸の奥がときめいてしまう自分が悔しい。でも、余韻に浸る間もなかった。濡れた入り口に、硬い指先が、つ、と押し当てられる。

「力抜け。……あとで痛くないように、ほぐしてやるから」

「ひ、そ、んな……は、ふう……♡♡」

つぶ♡と、指が中に入り込んできた。初めての異物感に息が止まる。硬い爪の感触と、温かい指の腹。自分の内側に他人が入ってくる、その事実だけで身体が強張る。

そのままぐぶぐぶ♡と粘着質な音を立てて、ゆっくり奥へ。壁を押し広げられ、収縮しようとする内側をこじ開けられていく感

覚に、背筋が伸びきった。

「指一本でそれかよ。このあとどうなっちまうんだろうな

あ……？　楽しみだ」

「ふ、ぐうう……♡」

言い返す余裕もない。耳元の愉悦に満ちた声が、逃げ場のなさを煽るだけだった。

じゅぶ、じゅぶ♡と浅く抜き差しされて、濡れた音が少しずつ滑らかになっていく。——そのとき、指がある一点をかすめた。きゅん♡とお腹が締まって、じーんと甘い痺れが下腹ぜんぶに広がる。

「ひゃ、な、に……？」

「ここか？　見つけた」

セルクはすかさずその一点を、ぐっぐっ♡と指の腹で押しはじめた。

「あんッ♡ そこ、やだぁ♡ 押さないでえ……♡」

押されるたび、鋭い快感が突き上げて腰が跳ねる。今まで存在も知らなかった場所を的確に抉られて、身体の芯が内側から溶かされていく。

（ああ、だめだめ……！ さっきからセルクに、変な気持ちにばっかり、させられちゃってる……！ どんどん強くなって、抑えられないっ……こんな、おかしいのに……！）

「ここ、Gスポットっていうんだぞ？ これも覚えとけよ、ガリ勉強ちゃん」

「やっ♡ そんなの、おぼえたくない……っ♡ うあっ♡ そこ、

もういじめないでえっ♡　へんになっちゃうのっ♡」

ぐちゅっ♡ぐちゅぐちゅ♡ぐりゅう♡♡

制止も虚しく、内壁をこね回す水音が耳にこびりつく。

「うんうん、変になっちゃうなあ……♡　ならこっちの小さいクリちゃんも一緒に、もーっと変になろうな？」

もう片方の手が伸びてきて、震える突起を捉えた。

「ひ、やめ……っ！　どっちもは……！　ひぎゅう……♡」

ナカではグリグリ♡と同じ場所を抉り続け、表の花芯は上からコリコリ♡と皮ごと捏ね回される。内と外、ふたつの点が繋がって、ひとつの大きな波になっていく。逃げ場がない。

（うそうそ、どっちもなんて、ずるい……♡ぜったい、ぜったいおかしくなっちゃう……っ！）

「あ、待って待って、それだめ！　だ、めええ♡　また、さっきの、きちゃうっ……！」

「ん？　きちゃう、じゃないだろ。教えただろうが。——イク、だ。ほら、言ってみろ。イクって言えたら、イかせてやる」

「なっ……い、言えな、そんなこと……っ♡」

（い、言ったら……気持ちいいって、認めたことになっちゃう……！　魔人なんか、それだけは……っ）

「ふーん？　じゃ、おあずけな」

びた、と両方の指が同時に止まった。

「……っ!?　あ……」

寸前まで積み上がっていた波が、行き場を失って疼く。ナカが物欲しげにひくついているのが、自分でわかってしまう。腰が、

勝手に、揺れて――。

「ほーら、腰が言ってるぞ？　ん？　どうしてほしいんだ？」

「う……うう……っ、や、やだ、これやだあ……♡　うご、いて……」

「動いてほしけりや、言うことはひとつだろ？」

ぐり♡と、焦らすように一度だけ弱く挟られて、最後の理性が焼き切れた。

「い……イクっ！　イクからあっ！　イかせてえっ……♡♡」

「――よく言えた。いい子だ」

ご褒美とばかりに、内と外、ふたつの指が一気に速くなる。

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡こりゅこりゅ♡♡♡

「あ、あ、だめっ、イクッ、イっちゃう、イクイクうつ……!!

♡♡♡

二度目の絶頂は、一度目より深かった。視界が白く染まり、全身が硬直して、ナカがぎゅうぎゅうとセルクの指を締めつける。

「……っと。すげえ締まり。指、持ってかれるかと思ったぞ」

わずかに掠れたその声に、余裕の欠けた熱が混じっていた——
気づいてしまって、痙攣の続く胸の奥が、また別の意味で跳ねる。
けれど、休ませてはもらえなかった。指が二本に増やされ、ぬ
ぽっ♡ぬぷぷっ♡と深く浅く出入りしながら、今度はもつと奥を
探りはじめる。

「うそ……まだ、するの……？」

「当たり前だろ。今までの本番前の準備運動だ。……お。ここ
だな」

指先が、いちばん奥の壁を、とん、と優しく叩いた。瞬間、今までの鋭さとはまるで違う、重くて深い快感が腰ぜんぶを包み込んだ。

「あんっ♡　そこ、なに、へん……っ♡　おく、だめえ……！」

「奥も好きか。初めてのくせに、素直な身体してやがる……♡
あとでここ、ちんぽの先で、たーっぷり教えてやるからな」

ぐりゅっ♡ごぼっ♡と奥を捏ねられながら、指がさらに一本増やされる。三本の指に押し広げられ、搔き回され、もう涙も汗も涎も区別がつかない。ナカは蕩けきって、溢れた蜜がセルクの手
のひらまで濡らしていた。

「ひいつ♡　もうだめ、また、イクっ♡　イクううっ!!♡♡♡」

三度目。もう数えるのもやめた頭の芯で、白い火花が弾ける。

「……よし。そろそろ本番だ」

（本番……？　今までのこれ、ぜんぶ、本番じゃないってこと……!?）

「顔に出てるぞ？　どこまでもかわいいな、ノエル。お勉強ばかりも考えもんだ」

「う、うるさい……！」

「安心しろ、オレがゼーんぶ教えてやる……♡」

そう言っでセルクが取り出したのは、あまりにも——禍々しい物体だった。

股間から隆起したそれは赤黒く、太い血管が浮き、先端から滲んだ透明な液でてらてらと濡れ光っている。指三本であれだけいっぱいだったのに。あんな質量が、私の中に？

想像を絶する大きさに、恐怖が全身を駆け巡った。

「ひっ……！」

見せつけられたそれが、どくり、と脈打った。血管の浮いた表面がうねり、先端から滴った透明な液が糸を引く。

（うそ……脈打って、うごいてる……ほんとに、別の生き物みたい……！）

「よく見とけよ？　これからこれを、お前の中に入れて掻き回すんだ。奥まで、ずっぽりな」

セルクはわざとらしく腰を突き出して、その質量を私の腹の上に、べたりと乗せた。熱い。それに――長い。先端が、臍のあたりまで届いている。つまり、入ったら、そこまで。

「むり……無理だよお、そんなの、ぜったい入らない……！」

必死に後ずさろうとした身体は、片腕であっさり引き戻された。背中がシーツに沈んで、体勢を立て直す間もない。気づいたときには、もう膝を割られていた。濡れた入り口に、灼けるほど熱いものが、ぴたりと押し当てられる。

「大丈夫だ。あれだけ慣らしたんだから」

「しん、じられない……そんなの……っ」

恐怖で涙が溢れる。なのに金の瞳は、これから行われることへの期待で爛々と輝いていた。

「力抜いとけ。……いくぞ」

ズリユツ——。

「いたい！ いだいっ……！」

肉壁を無理やり押し広げて、灼熱の楔が入ってくる。引き攣れ

るような鋭い痛みが股の奥で弾けて、脳天まで駆け上がった。呼吸の仕方が、わからなくなる。

「だろうな。処女はみんな痛い。……息、止めるな。吐け」

低い声に言われるまま、震える息を吐く。そのわずかな弛緩を捉えて、彼は少しずつ、少しずつ腰を進めてくる。ミチ、ミチ……と、狭い内側が限界まで押し広げられていく。奥で、ぷつ、と何かが切れる熱さがした。滲むそれが痛みなのか血なのか、もう区別がつかない。歯を食いしばって、嗚咽を飲み込む。

「——全部入ったぞ。よく頑張ったな」

ようやく腰と腰が密着したとき、汗で額に張りついた私の前髪を、大きな手が掻き上げた。そのまま唇に、ちゅ、と軽いキスがひとつ。

(……なんで。憎いはずなのに……なんで、あつたかいの……)
痛みでぐちゃぐちゃの頭の隅で、その温もりに戸惑っていると、セルクはふいと目を逸らした。

「……余計なこと考えてる顔だな。動くぞ」

「え、ま、待って、まだ……ううっ、痛い……!」

「しょうがないだろ。慣らすしかない」

不機嫌そうに言っ——どうして彼のほうが不機嫌になるのか、わからない——一定のリズムで、根気強い抜き差しがはじまった。最初は引き裂かれる痛みだけだった。けれど往復のたびに奥から潤みが増して、くちゅ……♡ぬちゅ……♡と湿った音が混じりはじめる。痛みの膜の下で、何かが、ずくりと疼いた。

「んっ……♡」

思わず漏れた自分の吐息に、自分で驚く。

（いまの、声……こんなに痛いのに、なんで……？）

「慣れてきたな？ ……じゃあ、そろそろいくぞ」

声色が変わった。ずるり、と抜け落ちる寸前まで引き抜かれて

ズチュンッ!!♡♡ズチュンッ♡♡ズチュンッ♡♡

「ひあっ!？」

最奥まで一息に貫かれて、頭の中で火花が散った。息が詰まる。そのまま、同じ衝撃が繰り返し奥を襲う。

ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡

「ひああっ♡♡ 痛いよおっ！」

「すぐよくなるって」

肉のぶつかる鈍い音。緩まない律動。苦痛にひたすら耐えていた——そのとき、先端がある一点を擦り上げて、身体がビクンと大きく跳ねた。

「ほう。……なあ、ここ、さつき教えてやったよな？ 指だけ

じゃない、ちんぽでも当たるんだよ、ここは」

言うなり、セルクは正確にそこを目掛けて腰を使いはじめた。

奥の手前の一点を、張り出した部分で挟るように、執拗に。

グリュツ♡グリュツ♡グリュツ♡

「ああっ!?♡ やだやだやだっ!♡ それやだあ!♡」

痛みの底から、痺れるような別のものが背筋を駆け上がってくる。こわい。こわいのに、これは——。

「その割に、締め付けてるじゃないか。ここがいいんだろ？」

指摘されなくてもわかっていた。私の内側が、彼の形に、ぎゅうつと吸いついている。

「やめてっ！　そこ……そこはあっ♡」

涙でぐちゃぐちゃの顔で懇願したのが、逆効果だったらしい。律動が加速して、挟られるたびに全身が跳ねる。ズンズンと打ち込まれる硬さと質量が、痛みの中の、奇妙な充足に変わっていく。結合部から溢れたものが、伝ってシーツに染みていくのがわかる。「はっ……♡　締まりが良くなってきた。もう痛いだけじゃないだろ？」

「ちが……うう……っ♡」

「違わないだろ。いい加減、素直になれよ」

言いながら、セルクは腰を深く沈めたまま、指先で花芯を摘ま

み上げた。

「ひあああっ!?♡♡♡」

内と外。ふたつの快感が結合部で繋がって、視界がチカチカと明滅する。彼は花芯を扱きながら、ぎりぎりまで引き抜いて――

「いくぞ」

ズチュンッ!!!♡♡♡

「あああッッ!!♡♡♡」

根元まで一気に叩き込まれた。行き止まりを、ごつんツと突かれる衝撃と、花芯を搾られる快感が同時に来て、頭の中が真っ白になる。

「ひぐっ……♡ おく……おくっ、きてる……♡」

「そうだ。オレのが、お前の子宮まで届いてる。……わかるだ

ろ？」

セルクは反応を楽しむように、そこに先端を押しつけたまま、ぐりぐりと腰を回した。ねちよねちよ♡という音とともに最深部を掻き回されて、背中が勝手にシーツから浮く。

「やだあっ！ そこばっかり、しちやダメえっ♡」

「なんでダメなんだ？ いいから締まるんだろうが」

そのとおりだった。私のナカは、侵入者を引き留めるみたいに収縮している。セルクはそれに応えるように、ゆっくりと深い抜き差しをはじめた。

ぬぷ……ぬぷ……ずぷっ……♡

「ああ……っ♡ これ、だめ……きもち、よくなっちゃ……っ♡」
口をついて出た自白に、彼は満足そうに笑った。

「フッ。さっきまで痛がってたのは誰だ？」

「う、うるさいっ……！♡」

抗議する唇は、宥めるように塞がれた。舌を絡め取られ、口の中を愛撫されるうちに、身体の力が抜けていく。その隙を突いて、律動がまた激しさを増した。

ぱちゅんっ♡ぱちゅんっ♡ぱちゅんっ♡

「んんっ♡ ふぁ……♡ やぁっ♡ あんっ♡ あんっ♡」

水音と、肌のぶつかる音が反響する。無意識に、セルクの背中に爪を立ててしまう。彼はそんな私を抱きしめながら、さらに奥を突き上げてきた。

「かわいいな、ノエル……♡ あんなに嫌がってたオレに抱かれて、そんなに善がって」

（そう、だ……あんなに嫌だったのに……いま、セルクに抱かれて、気持ちよくされちゃってる……♡なのに、やめてほしく、ない……っ）

憎いはずの相手に、身体は正直に快感を貪っている。その背徳が、余計に熱を煽る。

「ああっ！♡ セルク……きちゃう、また、きちゃううっ♡」

高まる予感に怯える私を抱き締め直して、セルクは追い込みにかかった。

パンッ♡パンッ♡パンッ♡——打擲音の間隔がどんどん詰まって、ひとつながりの連打になっていく。

「そろそろ、オレも出すぞ……」

「ああああっ♡ あっ♡ な、なにを……？♡」

「フフ。精液だよ、せいえき。オレの子種で、お前のナカがいっぱいになるまで、たっぷり注いでやる」

「ひ……、それ、だけは……！」

体内が精子で満たされる想像に、溶けていた頭が一瞬で冷静になった。そもそも人間と魔人の間で妊娠なんて可能なの？

——そんな疑問が脳裏を駆け巡る。

「ノエルは知らないだろうが……魔人の子を人間の女は孕める。

確率は低めだが。そしてもし孕めば——オレたちの世界に連れ帰れるんだ。魔人との間に繋がりができるから」

「そんな……そんなこと本には！」

召喚に使った本はすべての内容を暗記していたが、そんなことは一言も書いていなかったはずだ。

「書いてないだろうなあ……あの本が書かれた時代、女で召喚できるような学のあるやつはいなかった。だからそんな注意わざわざ書かなかったのさ」

「嘘……」

恐ろしい事実^に血の気が引いていく。

「嘘だと思うなら試してみればいい。お前の子宮で。これから毎晩毎晩オレの精液でパンパンになるくらい満たしてやるから」

嗜虐と、独占の熱。ふたつの混ざった目に射抜かれて、抵抗する気力が溶け落ちる。拒みたいのに、心の奥底で期待してしまっている自分が、怖い。

同時に、ナカで肉塊が加速する。最奥を穿つリズムが、狂ったように速くなる。

バヂユツ♡バヂユツ♡バヂユバヂユバヂユツ♡♡♡

「……っ、出すぞ……！」

逃げられない。ナカを埋め尽くす質量が、びくり、と大きく脈打って――

「いやあああぁっ!!♡♡♡」

ドピュッ! ドピュルルルッ!! ビュグッ、ビュグッ……!

熱いものが、体内で解き放たれた。灼熱の奔流が子宮口に叩きつけられるたび、小さな絶頂が続けざまに起きて、全身の力が抜け落ちていく。意識が霞む中でも、腰だけが、自分の意思と関係なく小さく痙攣し続けていた。

「ハァ……ハァ……♡」

ゆっくりと引き抜かれると、コポッ、と音を立てて白濁が零れ

落ちた。もう、指一本動かせない。

——終わった……の……？

呆然とシーツに沈む私の頬を、セルクが軽く叩いた。見上げた先で、彼は意地悪く微笑んでいた。

「次は、コレだ」

「……え……？」

さっきまで私を貫いていたものが——変わりはじめていた。

みしり、と質量を増して、太く、長く。表面にはゴツゴツとした突起が浮き上がり、反りが深くなり、先端はより鋭く尖っている。さっきの比ではない。胎の奥を抉るためだけに設計された、凶器のような形へ。

「ひっ……!? な……なにそれ……さっきは、そんなんじゃない……」

「当たり前前だろ？ 姿を変えられるんだから、コレだって、どうとでも変えられるに決まってる」

セルクは笑った。

「さっきは初めてだったからな。控えめにしてやったんだ。——
優しいよな？」

「なっ……あれで……控えめ……？」

愕然とする。あの質量だけで、意識が飛びかけたのに。

（じ、時間……そうだ、契約……時間が来れば、終わるはず……
あと、どれくらい……っ）

「なに期待してる顔してんだ？ ——まだ十分残ってるぞ。時間
まで、たっぷり楽しませてもらう」

すがった最後の希望まで、正確に撃ち抜かれた。セルクは震え

る私の腰を軽々と掴み上げ、凍りついた入り口に、異形の先端を
びたりと押し当てる。

「安心しろ、ノエル。さつきより、もつと気持ちよくしてやる」

その声には支配と一緒に、奇妙な熱が滲んでいた。まるで、大
事な物を慈しむみたいに。

「そんな……！　こんな入れられたら、壊れちゃう……！」

「壊れねえよ。——他の男じゃ二度と満足できなくなるくらい、
徹底的に良くしてやるための、特別な形だ。お前のいいところを、
このゴツゴツで、しっかりゴリゴリ引っ掻き回してやれるように
作ってある。……最高だろ？」

「ひ……そんなの、入るわけ……っ！」

「入るさ。——ノエル専用の形なんだから」

無慈悲な宣言と同時に、セルクは一切の容赦なく――

ズブズブッ……グニユリッ♡♡♡

「ああああッ……!! ひいいいいッ……いやあああ~~~~ッ!!」

さっきとは比較にならない圧迫感。ゴツゴツとした突起のひとつひとつが、慣らされたばかりの内側を、内から引っ掻くように擦り上げていく。未知の感覚が、脳天を直撃した。

「はっ……せつま……。でも、絡みついて、くる……。っ。いい子だ」

セルクの声が、わずかに上ずっていた。私の絶叫すら愉しむように、彼はゆっくりと腰を動かしはじめる。

ぬちゅっ……ぐちゅっ♡ゴリッ、ゴリッ、ゴリッ♡♡♡

突起が弱い場所を的確に掠めるたび、意志と関係なく、電流み

たいな快感が駆け巡る。

「おがしくなるうっ！ それっ……それダメええっ♡♡♡」

涙と涎でぐちゃぐちゃになって抵抗しても、身体は裏切って、ナカは侵入者をきゅうきゅうと締めつける。

「どうした？ 最高に気持ちいいだろ。認めろよ、ノエル」

頬を撫でながらの、勝ち誇った問いかけ。

「ちがうっ！ こんなのに、全然っ……気持ちよぐ、ないいいっ！」
なけなしのプライドで否定しても、突起が弱点を押し潰すたび、

「ひゃんっ♡ あっ……あっ……ああっ♡♡」

甘い悲鳴が漏れてしまう。快樂と恐怖がない交ぜになって、もう、わけがわからない。

「……素直じゃないな。なら、こっちも最後は本気を出すか」

腰をがちりと固定される。直後、容赦のない連打がはじまった。

ジュボッ♡ジュボッ♡ジュボジュボジュボ♡♡♡

猛烈な勢いで行き来する異形。突起が無防備な肉襞を余さず削り上げ、最奥を突き上げる。思考が、碎けて散る。

(だめ、だめだめだめ、こわれる、こわれちゃ……っ♡)

「あああああっ！ おかしくなるっ！ 壊れちゃうううっ

♡♡♡

「——それがいいんだろうが。おかしくなったら、責任取ってやるよ。オレの世界に連れて行って、永遠に、こうして可愛がってやる」

耳元で囁かれた、甘い毒。その言葉が、最後の理性を焼き切っ

た。

「そ、そんなこと……ああああッ！ ダメえええっ♡♡♡

あッ♡ あッ♡ イグッ！ イグッ！ イグウウッ♡♡♡」

びくびくびくんっ♡と全身が痙攣して、絶頂に達しようとした、その瞬間――

ドツチュン!!!♡♡♡

最大級の一突きが、子宮口に叩き込まれた。

「んあッ!? んんんん~~~~ッ♡♡♡」

今日いちばんの衝撃に、背中が反り返って、結合部から愛液が噴き出す。

「くっ……！ また出すぞ……オレの子種、一滴もこぼさず受け止めろよ……！」

びゆるるるるっ！ どぴゅっ、どぴゅっ！ どぶっ……♡

熱い白濁が、洪水のように奥を満たしていく。その灼熱がさらなる追い打ちになって、

「あっ♡ あっ♡ もう……ダメ……」

ぐったりと脱力して、意識が半分、闇に落ちた。虚ろな目で見上げた天井が、ぐらぐらと揺れている。

「ハァ……♡ 今日はここまでだな。……まだ全然足りないが。

時間切れだ」

満足そうな囁き。結合部の隙間からは、入りきらなかった濃厚なものが、とろとろと溢れ出ている。

「ノエル。明日も、楽しみにしてろ」

彼は抜かないまま、ぎゅっと強く抱きしめてきた。お腹の中の

ものは、まだ硬さを保ったままだ。時間さえあれば、本当に、まだまだ終わらなかつたのだろう。

（あした、も……こんなの……）

これからの日々の予感に戦慄しながら——その戦慄の底に、認めたくない小さな疼きが灯っているのには、気づかないふりをして。私は気を失うように、深い眠りに落ちた。



「おーい、ご主人様。いつまで寝てる気だ？」

セルクの皮肉な声が降り注ぎ、私は重い瞼を開いた。部屋には朝の光が差し込み始めている。全身が鉛のように重い。そして

——下腹部に残る鈍痛と、内腿に残るべっとりとした感触。昨夜の陵辱の痕跡が鮮明に刻まれていた。

「……うるさい……話しかけないで……もう一度と……」

掠れた声で拒絶する。声を出すだけで喉がひりつく。シーツに包まるように身を丸めたが、それでもなお、秘所からトロリと垂れ落ちてくる感覚に身震いした。この悪魔の精液がまだ身体の中に残留しているのだと思うと吐き気がした。

「そうは言ってもお前、動けないだろ？ そんな乱れきった格好でどうする気だ？」

セルクはベッドサイドに立ち、腕を組んで見下ろしている。その様子は妙に機嫌が良さそうに見える。

「命令すれば、世話してやるぞ？ 優しくな」

優しく——その言葉が昨日の悪夢の回想を呼び覚ます。同時に、からかうような調子の声が、ひどく不釣り合いに感じられた。

「嫌だ……！ 触るな……！」

それでも抵抗は口からこぼれ出る。しかし身体は正直だった。腰が碎けて立ち上がれない。服を一枚纏うこともままならない。

「ずっとそんな状態にいる気か？ お前が大好きなあのおばさんが来たら驚くと思うが……朝起こしに来た娘が男の精液まみれで転がっているのを見つけたら、どんな顔をするだろうな？」

彼の声には挑発が入り混じっている。けれど、その口調にはむしろ状況を楽しんでいような、余裕すら滲んでいた。私の最後の矜持をズタズタにする言葉だった。

（悔しいけど……間違いない……）

頭の中で声が響く。母さんが、いつものように朝食の準備を促しに来るかもしれない。この惨状を見られたら？ 汚れたベッドシート、汗と涙と……他人の体液で汚れた娘の姿。想像するだけで血の気が引いた。

（こんなことで母さんを……心配させたくない。巻き込むわけにはいかない）

喉を鳴らして唾を飲むと、私は唇を噛みしめながらセルクを見上げた。金色の瞳に映る私は、疲れ果てた獲物そのものだった。

「……セルク……」

声は震えていた。

「私の……体を……拭いて……服を着せて……それ以外の……余計なことは……一切禁止……」

全部を呑み込んで、絞り出した言葉だった。

セルクは一瞬だけ目を見開いて——それから、ニヤツと歯を見せて笑った。

「——仰せのままに」

慇懃な返答と同時に、彼はベッドに膝をつき、いつのまにか用意していたのか、温かい濡れ布で私の身体を拭き始めた。

その手つきが、憎らしいほど丁寧だった。肌を清めて、髪を整えて、新しい服を着せて、乱れたシャツまで取り替えていく。命令した範囲を一ミリも越えない、完璧な世話。なのに、鼻歌でも歌い出しそうなくらい機嫌がいいのが伝わってくる。

(……なんで、そんなに楽しそうなの)

聞く気力は、もうなかった。

扉の向こうで、階段を上がる足音がする。母さんだ。

私は深呼吸をひとつして、いつも通りの顔を作った。

何もなかったような朝が、始まる。……昨日までと同じはずの「日常」が、少しだけ違って見えることから、目を逸らして。

〔中略〕

四章 賭け

まさか、あんなことになるなんて。

……舐めていた。認めたくないけれど、完全に、舐めていた。三十七項の注意事項を全部暗記して、契約の文言を二週間かけて練り上げて、それで安全を買ったつもりになっていた。あんな人外存在を、紙の上の理屈で意のままにできると思うこと自体が、間違いだっただ。

遺産の問題は、まだ何も解決していない。それでも、私の中で順番が変わった。今の私にとって一番危険なのは、顔も知らない刺客じゃない。毎晩、当たり前の顔で私の部屋に居座る、あの魔人のほうだ。

ピルを検討したこともあった。

けれど、その考えはセルクに鼻で笑われて終わった。

「そんなもの、魔人相手に効くと思うか？　そもそも人間とは繁殖の仕組みが違う。諦めろ。お前はオレの種を受け入れて、孕むしかないんだ」

諦めろ、と言われて諦められるなら苦勞はしない。

怖いのは、妊娠だけじゃなかった。あの行為に、私の身体が少しずつ慣れてきていること。抗いようのない快感を、どこかで待つようになっている自分がいること。行為の最中、無理やりとはいえ恥ずかしい言葉を言わされたことが、一度や二度じゃない。その記憶を思い返すだけで、身体の奥がきゅうと疼く。

だめだ。絶対に、だめ。

このままだと、私が私でなくなる。

やっぱり、契約を途中で解除する方法を探さないといけない。

〔中略〕



その夜。

シャワーを浴びて、着替えて、それでも肌の奥に居座る熱をもてあましながら、私は机に文献の写しを広げていた。往生際が悪

いのは、自分でもわかっている。でも、何もしないでいたら、昼間のあれこれを思い出してしまいそうだったのだ。

「まだ探してるのか」

背後の暗がりから、呆れ半分の声がした。振り返らなくてもわかる。ベッドの上で頬杖をついて、面白そうにこっちを見ているに決まっている。

「悪い？」

「別に。無駄だと思うだけでな」

「……っ」

言い返そうとして、振り返って、言葉が止まった。

セルクが、笑っていなかった。

「ノエル」

低い声だった。部屋の空気が、ずっと冷えた気がした。

「お前がこの契約を解除できるのは、任務の達成だけだ。そしてそれまでの間に孕めば——満了なんか関係なく、オレの世界へ連れ帰る」

金色の瞳が、暗がりの中でこちらを見据えている。いつもの、からかうときの光じゃない。もっと深くて、底の見えない色。

「もし——途中で半端に契約を切ろうなんて考えるなら。オレも、相応の手段を取らせてもらおう」

「……相応の、手段？」

「なんだろうなあ？」

ゾツとした。

何をする気、と聞き返そうとした声は、喉の途中で干上がった。

冗談の響きは、どこにもなかった。

怖い。足だって、机の下で情けないくらい震えている。

……けど。

——負けたく、ない。

「じゃ……じゃあ、孕まなかったら？」

気づいたら、口が動いていた。

「二十歳までに、私が孕まなかったら。……そしたら、おとなしく帰る？」

セルクが、片眉を上げた。

「お前……いい度胸だな。そんなに震えてるのに」

「う、うるさい！　どうなの？」

彼はしばらく私を眺めて、それから、ゆっくりと口の端を持ち

上げた。

「わかってるのか？ ノエル。つまりは賭けのためにも、これから毎晩、お前はオレにぐちゃぐちゃになるまで抱かれて、ナカがオレの精液まみれになるまでたっぷり注がれ続けるんだぞ？ それで、いいんだな？」

「……っ！」

想像が、走った。

今日だってそうだった。お腹の奥には、まだ彼に注がれたものの気配が残っている。昼間されたことを思い出すだけで、身体が芯から疼いてしまう。

あれを、毎日。毎晩。二年間。

でも、やるしかない。他に道がないのなら、一番マシな道がこ

れなら。

「……わかってる」

「ほう」

セルクは、心底楽しそうに嗤った。嗜虐的な、獲物を前にした獣の顔。なのにその奥で、別の何かが一瞬だけ光った気がして――気のせいだと、思うことにした。

「わかった。乗ってやる。……楽しみだな、ノエル」

ひとまずは、終わりが見えた。

二十歳。契約の満了。そこまで孕まずに逃げ切れれば、この日々は終わる。ゴールのない檻より、二年の檻のほうがずっといい。理屈の上では、確かに前進のはずだ。

――でも、あと二年。

それまでに待っている、長い長いこの魔人との戦いを思うと。
お腹の奥がまた、きゆう、と収縮するのを感じた。

体験版は、ここまでです。

このあと、堕ちるのは——最強魔人のほうです。

「お前があんなかわいいヤキモチなんか妬いてくれたからだろ？……ああクソ、思い出すだけで滾る……っ！」

「命令しろ、ノエル。——一時間は終わってる。オレはお前が許さなきゃ、この先は進めない。……ちゃんと、言え」

「はあ……マジで殺されそうだ、可愛すぎて……生きててよかった……！」

完全版は序章＋全十三章＋終章・後日談＋巻末特典2本、14万字超（文庫本およそ2冊半）。

体験版はその冒頭、約3万字です。

▼ この続きは、完全版で

https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/RJ01673710.html

気になったら、お気に入り登録だけでもどうぞ。